

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 9 月 15 日現在

機関番号：21301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24593376

研究課題名(和文) 出産後の夫婦の相互作用を促す予期的看護支援プログラムの構築

研究課題名(英文) Development and evaluation of promotional program for parental relationship after first baby's birth

研究代表者

塩野 悦子 (Etsuko, Shiono)

宮城大学・看護学部・教授

研究者番号：30216361

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、出産後の夫婦の相互作用を促す予期的支援プログラムの開発と効果の検討を行った。本プログラムは、子どもを育てる夫婦は互いに「2つのゲート」を開け閉めしていることを明らかにした先行研究を基に考案し、介入群に両親クラスで1回実施した。妊娠期と産後の2回の質問紙調査を平成27年2月～12月に実施し、評価には、夫婦関係満足尺度(諸井;1996)・夫婦間の愛情尺度(菅原ら;1997)・CES-D(2012)を用いた。結果、介入群104名、対照群211名で、2群間に差はなかった。しかし、産後(平均産後月数 4.3 ± 0.8 ヶ月)に、介入群の87%が本プログラムが役立っていたと回答した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to develop and validate the support program for parental relationship promotion after the birth of their first baby. The program was developed based on a previous study by the authors, which found that couples open or close two "gates" toward their partner after the birth of their first baby. The program was carried out once at perinatal class for the intervention group. From February to December 2015, two inventory surveys were carried out, one during pregnancy and one after birth. Three evaluation scales were used: Marital Satisfaction Scale (Moroi 1996), Marital Love Scale (Sugawara 1997) and CES-D (Shima 1985). There were 104 respondents from the intervention group and 211 from the control group with no significant inter-group differences. After birth (mean 4.3 months \pm 0.8 months after the birth), 87% of couples in the intervention group said that the program was useful.

研究分野：母性看護学

キーワード：産後 夫婦 相互作用 プログラム 介入研究 両親クラス

1. 研究開始当初の背景

(1)初めて子どもを育てる夫婦に対して、看護職は行政や医療機関において両親学級を開催し、主に父親の意識を高める支援に焦点が置かれている。しかし、多くの夫婦は、子どもとの生活が始まって初めて、2人を隔てる分極化に直面し¹⁾、本邦においても²⁾出産後は夫婦関係の親密性は有意に低下すると報告されている。妊娠期の初産夫婦には、出産や育児の備えのみならず、産後の夫婦の相互作用を高めるための理解が必要であると考えた。

(2)先行研究³⁾において、初めて子育てをしている夫婦は、“母親と父親のちがいを”に直面しながら、「2つのゲート」^{注)}を開け閉めしていることを明らかにした。出産後の夫婦の相互作用を促すには、この「2つのゲート」を開けるように支援することが効果的ではないかと考え、プログラムの開発と効果の検証を行うこととした。

注)「2つのゲート」について：

初めて子育てをする夫婦の間には2つのゲートがあると想定します。2つのゲートを開けるようにすることが産後夫婦の相互作用を促すことにつながるという考え方。1つは、“子どもの世話のゲート”。開け閉めする鍵は妻が握っています。このゲートを開ければ夫の子どもの世話への意欲が増し、閉めれば夫の意欲が削がれます。もう1つは、“思いやりのゲート”。開け閉めする鍵は夫が握っています。このゲートを開ければ妻の負担は軽減し、閉めれば妻の負担は増してしまいます。

2. 研究の目的

出産後の夫婦の相互作用を促す支援プログラム（以下、本プログラム）を開発・実践し、その有用性を検討する。

3. 研究の方法

(1)研究デザイン：準実験的デザイン

(2)データ収集期間：平成27年2月～12月

(3)対象者：両親クラス受講の初産夫婦。介入群では両親クラスで本プログラムを1回実施し、対照群では従来の両親クラスのみとした。

(4)本プログラム内容（表1～2、図1）：本プログラムは両親クラスの文献検討⁴⁾⁵⁾および成人学習理論⁶⁾に基づき開発した。内容の概要は、妊娠期の初産夫婦が「2つのゲート」を基本概念とした寸劇などを通じて、産後の夫婦の相互作用の特性を予期的に理解できるよう組み立てたクラスで、所要時間は約20分となる。

時間(分)	内容	方法
0.5	導入	説明
1.5	"子どもの世話のゲート"を閉める場面	寸劇(夫のオムツ交換)
1.5	"子どもの世話のゲート"を開ける場面	寸劇(夫のオムツ交換)
3.5	のちがいを夫婦で話しあってもらう 1)夫婦での話し合い 2)全員での共有	体験・説明 ・夫婦共有:2分、 ・全員共有:1.5分
1.5	"思いやりのゲート"を閉める場面	寸劇(夫の帰宅時)
1.5	"思いやりのゲート"を開ける場面	寸劇(夫の帰宅時)
3.5	のちがいを夫婦で話し合ってもら 1)夫婦での話し合い 2)全員での共有	体験・説明 ・夫婦共有:2分、 ・全員共有:1.5分
5	2つのゲートの説明	説明(資料使用)
1.5	夫婦で産後の状況をイメージしながら、「2つのゲート」による対処を話し合う	夫婦共有
計20分		

表2 子どもの世話のゲートと思いやりのゲート

子どもの世話のゲート

夫の育児実践は、妻がゲートキーパーとなり、夫をうまく育児に引き入れるか(ゲートを開ける)、追い出すか(ゲートを閉めるか)によります。

効果的に子どもの世話のゲートを開ける方法	子どもの世話のゲートを閉めてしまう方法
夫と子どもの接点をつくる 休日にはなるべく子どもの世話を夫に任せる 夫がひとりて面倒みる時間をつくる 妊娠期：両親クラス・健診に一緒に行く	夫と子どもの接点をなくす 夫に世話をさせないようにする 夫に世話を頼まないようにする
夫のやる気を促す やさしく頼む タイミングを伺って頼む 子どもの代弁をする 「パパとおふろ入りたいって！」 夫の知らないその日の様子を伝える	夫のやる気を削ぐ 夫に怒った口調で頼む もっとこうしてと要望する 手伝わぬことに攻撃する 夫に当たる 夫に愚痴ばかり言う 夫にうまく気持ちを伝えられない
夫のぎこちなさを大目にする ほめる：「さすが！」「うまい！」 余計な手や口は出さない 危ない手つきは見ないようにする	夫のぎこちなさを厳し目にする ほめない 夫のぎこちない手つきを指摘する 無言で自分でやりおす

思いやりのゲート

妻の負担感やストレスは夫がゲートキーパーとなり、妻に思いやりを明確に伝えられるか(ゲートを開ける)、否か(ゲートを閉める)によります。

効果的に思いやりのゲートを開ける方法	思いやりのゲートを閉めてしまう方法
大変な妻をよく見ている ・妻の大変な時に時間と空間を共有する ・産後女性の心身の不安定さをよく理解しようと努める ・妻のことを優先する	大変な妻を人まかせにする ・妻のことは実家や病院まかせ ・妻の大変な時に時間と空間を共有しない ・自分のことを優先する
妻の話をよく聞く ・話に反応する(うなずく、大きく驚く) ・解決を急がず、聞くことに徹する ・「大変だったねえ」と共感する ・反論しない・ゆっ(り)話せる環境にする(TVを止める等)	妻の話を受け流す ・他の事をしながら話を聞く ・自分も疲れているのと思う ・自分も疲れているのと思う ・妻のぐちにうんざりする ・話に反応せず、関心をしめさない
妻に劣いの言葉をかける 「大丈夫？」「寝られた？」「今日はどうだった？」 「疲れていない？」「ありがとう！」等 夫の劣いは妻をいやす魔法の言葉です！	妻に言葉をかけない(何気ない一言で傷つける) ・妻の機嫌次第で、触れないようにする ・「ミルクにしてもいいんじゃない？」等 産後の女性は何気ないことでも落ち込みやすい状況です
妻の作業を減らす ・できることは率先して手伝い、妻を助ける ・自分の洋服など脱ぎっぱなしにしない	妻の作業を増やす ・頼まれても渋る、断る ・自分の洋服など脱ぎっぱなしにして妻の仕事を増やす
妻のストレス発散を支える ・外出などの気分転換を勧める ・妻だけの時間を作る	妻のストレス発散を妨げる ・妻の買物やお金の使い方に文句をいう

図1 「2つのゲートを開こう」のロゴマーク



(5) 調査方法・内容

介入群と対象群の夫婦に、妊娠期と産後の2回の質問紙調査をした。本プログラムの評価指標には、夫婦関係満足尺度(諸井;1996)⁷⁾、夫婦間の愛情尺度(菅原・託摩;1997)⁸⁾、CES-D抑うつ自己評価尺度(島;1985)⁹⁾の3つを用いた。また介入群の産後の調査項目には、本プログラムの記憶度(覚えていた・覚えていない)と役立ち度(非常に役立った・

まあまあ役立った・あまり役立たなかった・役立たなかった)およびその理由(自由記載)の設問を入れた。

(6)分析

IBM SPSS Statistics Ver.22 を用いて、反復測定分散分析を行った。

(7)倫理的配慮

研究目的と方法、研究への協力の自由意思の尊重、匿名性の厳守について説明をし、対象者から同意を得た。なお本研究は宮城大学倫理専門委員会承認(No.1397)および研究協力1施設の倫理委員会の承認を得て実施した。

4.研究成果

(1)対象者の属性(表3)

介入群は4施設104名(夫51名,妻53名)で、回収率75%であった。対照群は7施設211名(夫101名,妻110名)で、回収率53.3%であった。調査時期は、妊娠期が平均妊娠週数33.0±3.7週、産後は平均産後月数4.3±0.8ヶ月であった。

	介入群(n=104)		対照群(n=211)	
	夫 n=51	妻 n=53	夫 n=101	妻 n=110
平均年齢(±標準偏差)	31.3(±5.0)		31.1(±4.5)	
平均産後月数	25.9(±20.3)		27.6(±23.0)	
調査時期: 妊娠期	平均妊娠週数	30.4(±4.5)	34.1(±2.6)	
産後	平均産後月数	4.2(±0.8)	4.3(±0.8)	
夫婦関係満足尺度	妊娠期	21.3±2.8	21.2±3.4	np
平均得点(請井)	産後	20.8±3.2	20.4±3.4	
夫婦間の愛情尺度	妊娠期	50.5±8.9	48.8±9.5	np
平均得点(菅原)	産後	46.6±9.9	45.3±9.9	
CES-D平均得点	妊娠期	10±7.5	9.7±7.4	np
(抑うつ評価尺度)	産後	7.2±6.2	7.8±7.3	
CES-D抑うつ陽性者	妊娠期	20(16.3%)	47(17.3%)	np
産後		9(8.5%)	20(9.2%)	
本プログラムの記憶	覚えている	93(87.7%)		
	覚えていない	13(12.3%)		
本プログラムの役立ち度	非常に役立っている	36(35.6%)		
	まあまあ役立っている	52(51.5%)		
	あまり役立っていない	10(9.9%)		
	役立っていない	3(3%)		
正産数		101(95.3%)	211(96.8%)	
CS数		18(17%)	27(12.4%)	
平均出生時体重		3097±368	3028.9±316.7	
核家族数		112(91.1%)	234(86.3%)	
里帰り先: 県外		49(55.7%)	33(19.1%)	*
里帰り期間	1か月	19(54.3%)	38(56.7%)	
	2か月以上	16(45.7%)	29(43.3%)	
夫立会い数		76(72.4%)	164(75.6%)	
夫の出産休暇取得率		18(34.6%)	33(31.3%)	
児の治療有		10(9.4%)	44(20.2%)	*
母の治療有		7(6.6%)	36(16.5%)	*
児の退院遅延		2(1.9%)	31(14.2%)	*
母乳率		74(69.8%)	152(70%)	

(2)2群における妊娠期から産後の評価指標得点の変化(表3)

夫婦関係満足尺度

介入群の妊娠期の得点は21.3±2.8点、産後は20.8±3.2点、対照群の妊娠期の得点は21.2±3.4点、産後は20.4±3.4点であり、夫婦関係満足尺度は産後に低下していたが、2群間に有意差はなかった。

夫婦間の愛情尺度

介入群の妊娠期の得点は50.5±8.9点、産後は46.6±9.9点、対照群の妊娠期の得点は48.8±9.5点、産後は45.3±9.9点であり、夫婦間の愛情尺度は産後に低下していたが、2群間に有意差はなかった。

CES-D抑うつ自己評価尺度

介入群の妊娠期の得点は10±7.5点、産後は7.2±6.2点、対照群の妊娠期の得点は9.7±7.4点、産後は7.8±7.3点であり、抑うつ自己評価尺度は産後に低下していたが、2群間に有意差はなかった。

CES-Dの抑うつ陽性のカットオフポイント(16点)を基準にすると、介入群の妊娠期の抑うつ陽性者は20名(16.3%)、産後は9名(8.5%)であった。対照群の妊娠期の抑うつ陽性者は47名(17.3%)、産後は20名(9.2%)であったが、2群間に差はなかった。

(3)介入群における本プログラムの記憶度と役立ち度(表3)

介入群で産後に本プログラムを「覚えている」のは93名で87.3%が産後4ヶ月後に記憶していた。本プログラムの役立ち度は、「非常に役立っている:35.6%」と「まあまあ役立っている:51.5%」を合わせると87.1%であった。役立った理由として「喧嘩になりそうな時、思い出して何度も助かった(夫)」、「夫のあやし方に思わず嫌味を言いそうになったが、一度考えてから助言できた(妻)」、「まさか自分たちに産後の危機がくるとは思わなかったが、2つのゲートを知っていてよかった(妻)」等の自由記載があった(表4)。

普段以上に妻のことを考えるようになった。子育ての苦勞を考え、自分から率先して家事などを行うようにしている(夫)。
自分がオムツや抱っこで手こずっても、妻は厳しい言葉を出さず、フォローしてくれる。自分もなるべく育児に参加する様に心がけている(夫)。
夫婦でケンカになりそうな時、「2つのゲート」の話を思い出して言い争いにならずに済んだ事がたくさんあった(夫)。
夫婦でケンカにかけた言葉が、そのうち無意識でも言える機会が増えてきた(夫)。
仕事で疲れて帰った時でも妻に思いやりを持って接することができている。妻も育児に参加できるよう環境を整えてくれる(夫)。
出産前と出産後では、主人に対して望むことや期待することが少し変わった部分があり、そのことを事前に学んでいたのに役に立っている。感情的にならず、主人の立場も理解しようと思えている(妻)。
イラッとしてしまう時があり、(夫のあやし方など)思わず嫌味っぽく言いそうになったが、ゲートのことを思い出して一度考えてから助言した(妻)。
「二つのゲート」の話を聞いてから夫婦の仲がすごく良くなったように感じている。多くの人に知ってもらいたい(妻)。
まさか自分たちに産後の危機がくるとは思わなかったが、2つのゲートを知っていてよかった(妻)。

(4)まとめ

以上より、夫婦間の満足度や親密度ならびに抑うつ尺度において2群間の差はみられなかったため、本プログラムが夫婦の相互作用を促すことの効果は検証できなかった。しかし、介入群の記憶度と役立ち度は9割程度であり、寸劇等の成人学習理論を基盤とした方法が忘却を防いだとも言える。また、役立った理由からは、産後の夫婦の間で起こりがちな「2つのゲートを閉める」ことに早めに気づき、対処できていたことが伺える。今後はさらに臨床や行政での実用化を図るために検討を重ねることとする。

<引用文献>

- 1)Belsky J, Kelly J (安次嶺佳子訳) 子供をもつと夫婦に何が起きるか、草思社、東京、1995、10-14
- 2)中澤智恵、倉持清美他、出産・子育て体験が親の成長と夫婦関係に与える影響(4):第一子出産後の夫婦関係の変化と子育て、東京学芸大学紀要、第6部門、技術・家政・環境教育、55、2003、111-122、
- 3)塩野悦子、初めて子どもを育てる夫婦の産後3か月

までの相互作用、お茶の水医学雑誌、58(3・4)、
2010、107-117、

4)塩野悦子、大久保功子、山田志枝、高橋みや子、
成人学習理論に基づいた両親学級の文献検討、第15
回北日本看護学会抄録集、2012年9月1日、宮城大
学(宮城県大和町)

5)Etsuko Shiono, Noriko Okubo, Maki Saito, Aya
Taniguchi、Parents' Relationships after the birth
of their first baby: A qualitative meta-synthesis、
The 3rd Global Congress for Qualitative Health
Research(short paper)、2013、156-158

6)M.ノールズ(堀薫夫他訳)；成人教育の現代的実践
ペタゴジーからアンドラゴジーへ、鳳書房、2002

7)諸井克英；夫婦関係満足度尺度、吉田富二緒編：
心理測定尺度集、サイエンス社、149-152、2001

8)菅原ますみ、託摩紀子；夫婦間の親密性の評価：
日記入式夫婦関係尺度について、季刊精神科診断学、
8(2)、155-166、1997

9)島悟、鹿野達男、北村俊則、浅井昌弘；新しい抑
うつ性自己評価尺度について、精神医学、27、1985、
717-723

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

Etsuko Shiono, Noriko Okubo, Maki Saito, Aya
Taniguchi、Parents' Relationships after the birth
of their first baby: A qualitative meta-synthesis、
The 3rd Global Congress for Qualitative Health
Research(short paper)、査読有、2013、156-158

〔学会発表〕(計3件)

塩野悦子、大久保功子、山田志枝、高橋みや子、
成人学習理論に基づいた両親学級の文献検討、第15
回北日本看護学会抄録集、2012年9月1日、宮城大
学(宮城県大和町)

塩野悦子、大久保功子、産後の夫婦の相互作用を
促す看護支援のあり方 両親学級への新しい提言、
第19回日本家族看護学会、2012年9月8日、学士会
館(東京都)

Etsuko Shiono, Noriko Okubo, Maki Saito, Aya
Taniguchi、Parents' Relationships after the birth
of their first baby: A qualitative meta-synthesis、
The 3rd Global Congress for Qualitative Health
Research、2013年12月4日、Pul Iman Hotel、Khon Kaen
(タイ)

6. 研究組織

(1)研究代表者

塩野 悦子 (SHIONO, Etsuko)

宮城大学・看護学部・教授

研究者番号：30216361

(2)研究分担者

大久保 功子 (OKUJBO, Noriko)

東京医科歯科大学・保健衛生学科・教授

研究者番号：20194102